

第2回水産教育のあり方に関する検討委員会

日 時 平成21年2月18日(水)
13:30～16:00
場 所 浜田合同庁舎 大会議室

会長挨拶

本日は、朝早くから、また遠方から本会のためおいでいただきありがとうございました。この厳しい経済環境の中、特に民業にお就きの方には、貴重な時間を割いていただきあつく感謝申し上げます。

午前中の浜田水産高校の生徒たちの顔つきを見て、この子たちの未来のために何かをしなければならぬと皆さんも思われたと思います。そのためにも、この会でしっかり議論していきたいと思っています。

今回は水産学科の教育内容ということで、教育現場にいない我々には分からないことが多いと思いますが、しっかりと説明を聞きながら、皆さんのこれまでの経験や知識をもとに、率直な意見をいただいて考えていきたいと思っています。

また、前回事務局にお願いした、本委員会のロードマップも今回示していただくことにしております。そういう全体の流れも頭の中に置きながら、考えていただきたいと思えます。(拍手)

委員自己紹介

前回、欠席であった小田委員、鷗鷗委員、三代委員からの自己紹介。

議題1 全体計画説明

(本委員会の全体計画について事務局から説明)

議題2 前回出た質問について

(前回出た質問について事務局から回答)

【質疑】

○委員

神海丸の運航見通しは。

○事務局

明確な方針決定はないが、おおむね平成27年度に新船建造という見通しを立てている。

議題3、4、5

(資料4～7により事務局から説明)

【質疑】

○委員

資料4を見ると、400トン未満の近海用練習船を持っている県は少ないが、そういう県では実習をどのようにしているか。

○事務局

次回、説明させてほしい。

○委員

全国の水産高校において、県外から入学している生徒はどれくらいいるか、次回までに調べて教えてほしい。

○委員

浜田水産高校の生徒との懇談で、練習船の居住スペースを広げてほしいという要望が出ていたが、平成27年に新船建造を行う場合、現在のトン数で、居住スペースを広げながら60人分の部屋が確保できるのか。もっと大きい船に変える必要があるのではないか。

○事務局

船員や生徒の数が増えれば現在のトン数では間に合わないので、大きくなるのは当然である。

○委員

そうすると建造コストも相当かかると予想されるが、そういう問題についてどう考えているか。

○事務局

この検討委員会でご意見をいただきながら、どういう方向が考えられるのか検討しているところである。

○委員

資料5を見ると、隠岐と浜田で学科やコースの名前が違っていたり、同じ学科でも科目

のとり方が違っていたりするが、これはなぜか。

○事務局

科目の選択について言えば、たとえば浜田水産高校では「操船」が「英語」との選択になっており、進学する生徒は英語が選べるようになっているが、隠岐水産高校では全員「操船」を学習させている。生徒や地域の実情に応じて、学校で変えているということである。

○事務局

学科やコースの名前であるが、海洋系については、名前は違うが内容はほぼ同じと考えていただいても良い。食品系については、浜田水産高校は商業系の科目を若干入れており、商業や流通の学習もすることから「食品流通科」としている。隠岐水産高校は「栽培漁業コース」で資源生産にかかる学習もすることから「海洋生産科」としている。

【協議】

○会長

協議のポイントとしては、1つは、なぜ中学生が水産高校を選択しないのかという入口の問題、もう1つは、卒業生の受け皿がどれほどあるのかという出口の問題、さらに言えば、教育の中味の問題がある。

この3点を中心に議論していきたい。

○委員

以前から、専門高校は次世代を担う人材を育成する必要な高校であり、それをなくすことは島根県にとって大きな痛手になると考えていた。

ただ、ここまで少子高齢化が進んでいる以上、県外の生徒を呼び込むことも考えるべきではないか。その際重要なのは、特徴のある、時代にマッチした、企業が必要としている教育内容。さきほど学科やコースの名前について意見が出たが、教育内容が同じであるなら名前は統一した方が良いだろうし、違った名前にするなら浜田と隠岐で特徴を出した方が良いのではないか。

高校のあり方を幅広く考えることも必要。企業と連携して、社員の長期研修の場にするとか、60歳を過ぎた方の生き甲斐学習の場にすることも考えられる。

また、財政的なことを考えるなら、他県との連携は考えられないか。練習船を共同運航することでのコストを抑えることも可能になる。

○委員

資料6に海技士試験の結果が出ているが、少ない生徒数でこれだけの成果を上げているのはすばらしい。ただ、このことを地元の人たちがどれほど知っているのか。水産高校の卒業生に対する世間での評価や職場での待遇はどうなのか。水産高校で学んだことを活かして活躍できているのか。

もっと、水産高校生の良いところを積極的に発信してしていったらどうか。たとえば、資格をもった卒業生が地元の船に乗って活躍している様子を映像化していくとか。

○委員

両校とも定員割れが続いているが、定員のあり方について考える必要はないか。学科の配置についても、浜田と隠岐で役割分担することも考えるべき。それをしないと、いずれは統合という話が出てくるのではないか。新潟海洋高校のように、陸と海にわたる科目を設けることも一つのアイデア。

また、本県の水産高校は専攻科に特徴があり、他県に対してアピールする力がある。これの拡充強化を考えるべき。失業者が増えている現状から、社会人対象の再教育の場として活用することも考えて良い。

○委員

今回、初めて練習船に乗ってみて、居住スペースの狭さに驚いた。今後、女子生徒が増えていけば、改造する必要も出てくるのではないか。

また、専攻科の生徒と話していて、島根県にとって水産高校は重要な役割を持っていると感じた。水産業のような第一次産業は人間が生きていくためには重要な部分。経費がかかるとしても、子どもたちが気持ちよく勉強できるような環境を整えるべき。

子どものころから海に関する学習の機会を設け、海に対して魅力を感じるような仕掛けをつくる必要があるし、映像を用いて、海や漁業の魅力について情報発信していくことも必要。

○委員

先日出された再編成計画を見ると、今後さらに生徒数が減少する中で高校をどうすべきかという問題が喫緊の課題として示されており、これまでは、総体の生徒数が減る以上、何とか工夫して減らすしかないという考えでいた。ただ、浜田や隠岐のように、海や漁業があり、水産高校があるという環境の子が水産の道を選んでいることを考えると、2つの水産高校の存在意義も無視できない。午前中の7人の生徒の話聞き迷っている。

また、水産高校と一口に言っても、海洋系と食品系では内容的に全く違う。やはり分けて考えた方が良いのではないか。

魅力ある学校環境とか練習船の居住スペースという話も出たが、それがあから中学生が水産高校に来るとか、ないから来ないという問題ではないような気がする。実際に漁船に乗れば厳しい環境で働くのだから、そういう経験も必要。

午前中の生徒の話聞いて感じたのは、目標を持っている子はやはり違うということ。ただ、他県から意欲のある生徒を呼ぶと言っても、他県も生徒数減少という現実直面しており、そう簡単にはいかないだろう。

○委員

一番興味があったのは地域産業の担い手育成事業。たとえば、養殖わかめの生産技術の実習とか、種苗生産技術、トレーサビリティシステム、一夜干しの実習、HACCP等、こういう勉強を専門性を持ってやってほしいと思う。もちろん、高校であるから専門科目の時間は限られているだろうし、3年間で高いレベルの技術を修得することは難しいと思うが、将来的には必要になることであるから、これを実効性のあるものにし就職につなげていくことが重要。

○委員

以前は、浜田にも船団が35ヶ統もあったが、現在は5ヶ統しかない。第一次産業は一度やめてしまうと再開することは困難。やはり、水産業界がもう少し力をつけて、水産高校と一緒に担い手を育てるよう努力する必要がある。

船員の高齢化も進んでおり、乗組員には外国人を入れているが、いつまで続くか分からない状況。そう考えるとやはり地域の若い力が必要だという話を地域でしている。

○委員

漁業従事者の減少については危惧しているところである。高い資格を持った高校生に地元の産業に就職してもらえるよう、水産加工業とも連携しながら魅力ある水産業づくりを心がけていきたい。

○委員

少子化という現実の中で、将来、2校の水産高校が統合せざるをえなくなった場合、保護者の負担が大きくなることを心配している。

また、現在、若年者の県内定住ということが重要な課題となっているが、そのためには、ある程度所得が伴い生活が安定することが必要。それをどう保障していくか。県内の水産

業者も経営者として努力しており、水産高校で立派な技術を身につけた人が、そういうところに就職して幹部として力が発揮できるよう、育てていくことが必要である。

○委員

本日の3つのテーマのうち、「教育内容が地域や産業界のニーズに応えるものになっているか」ということについて言えば、先生方の大変な努力により「地域産業の担い手育成プロジェクト」の成果が出つつあるところである。「本県の水産高校において必要とされる資格は何か」ということでは、資料にもあるとおり、全国的に見ても高いレベルの成果をあげている。「より効果的な地域との連携は考えられないか」ということでは、先生方が学校から外に出て行ったり、外部の人に来ていただいたりして本当にかんばっておられる。

たとえば、隠岐水産高校の学校要覧を見ると、「地域とともに歩み、地域に必要とされる学校」ということで、学校としての行動計画が示されている。それを見ると、これまで委員の皆さんが指摘されたようなことはほとんど述べられており、問題はこれをどう現実の行動に表すかだと考えている。

今日は神海丸を見学したが、生徒は3ヶ月の乗船実習をとおして大きく成長して帰ってくる。やはり、生徒にとって乗船実習は学習の大きな柱。

○委員

隠岐の場合、産業の中で水産業の占める比率がきわめて大きい。観光振興をするのにも水産業の支えが必要。そういう意味で、隠岐水産高校と浜田水産高校を一つにするというような議論はすべきではないと思う。もし、水産高校が浜田に一本化された場合、隠岐の子どもたちが浜田に行くことは難しい。

学校の門戸を開き、社会人や団塊の世代やIターンで島根にやってきた人たちの受け皿として高校を活用することも考えていくべき。

第1回目の資料で、専攻科の卒業生の大部分が官庁船等に乗って県外に就職しているようになっているが、実はこういう人も住民票は隠岐に残しており、休みになると隠岐に帰って来ているということである。専攻科は他県に就職する生徒を育てていると単純に結論づけることはできない。

○会長

いくつか論点があったと思うが、最も重要なのはカリキュラムが魅力あるものになっているかということだと思う。それがないと中学生も来ないし、就職の受け皿もない。社会

人の受け入れとかダブルスクールという話もあったが、基本になるのは、やはり本来の教育内容をどうするかということになると思う。

専門高校の先生はきわめて熱心にごんばっておられ、先日も農業高校の研究発表会に行ったが、きわめて深い内容を扱っており驚いた。水産高校もこういう場を設けて、社会に対して発信していくことが必要。しかし、現実には十分に認知されていないため、中学生も志望しないし、受け皿もないということになる。こういうことをどうやって変えていくか考えていく必要がある。担い手育成事業についてももしっかり検証して、それを教育内容に反映するような作業を行っていただきたい。

門戸を広げるという話もあったが、プラスαの魅力作りとして重要であり検討すべき。専攻科については、まだ十分に認知されていないからスポットライトを当てていこうという意見があったが、そのとおりだと思う。

また、食品関係の専攻科とか、浜田や隠岐以外の地域を対象にした体験入学とか、いろいろ考えたいことはあるので、次回のところで、いくつか論点をまとめて提示したい。

○委員

重要なのは受け皿。魅力的なカリキュラムを考えるとと言っても、水産業界に就職している生徒が少ないという実態を踏まえる必要がある。

高校教育としての制度論についても知っておく必要がある。統合という話も出たが、統合せず残すためにはどういう工夫の余地があるのか、そういうことも踏まえておかないと議論にならない。

昔、生徒がたくさんいた時代から、子どもの数や進学率や求人状況の変化にともなって学科の編成も学校の規模も大きく変わってきた。この歴史的な流れの中で、特に水産高校に大きな影響を与えたのは何なのか。たとえば、以前は若い人が地元の漁船にもたくさん乗っていただろうが、今ではそこに外国人が入っている。そういう歴史的な流れを見たとき、カリキュラムを魅力的なものに変えれば中学生が水産高校に向かうと言えるのか、言えないのか。そういうことも踏まえて考えていかないといけない。

○事務局

高校教育としての制度論ということであるが、教育委員会では現在今後10年間の再編成計画を策定中であり、統廃合基準も含まれている。また、教員定数算定の基礎となる生徒数の仕組みについても国に定めがある。そういうことを、必要に応じて情報提供していきたい。

○委員

今日は浜田水産高校を見学したが、機会があれば、ぜひ隠岐水産高校も見に来てほしい。

議題6 その他

○事務局

現在、3月中に2回の委員会を予定しており、スケジュール調整が難航する可能性がある。そのため、今回はスケジュール確認の用紙に土日も入れさせていただいた。もちろん都合が悪い委員は「×」をして返していただいても良い。もし、最も多くの委員の都合がつくのが土日であった場合は、土日開催もありうるということをご了解いただきたい。

教育監挨拶

委員の皆さまには大変お忙しいところお出かけいただきました。特に本日は朝早くから、そして遠くからご出席いただき、まことにありがとうございました。

神海丸も見てください、専攻科の生徒の考えも聞いていただきましたが、生徒たちが、目的意識をしっかり持って学んでいることを大変心強く感じました。

午後は検討委員会ということでご議論いただいたわけですが、特に開かれた学校づくりとか外部へのアピールといったことについてご意見をいただきました。このことについては、我々としてもぜひ考えていかなければいけないと強く感じたところであります。

次回は制度的なことも説明いたしますが、主要な論点としては、県の水産業を担う若手をどう育てていくかということについてご議論いただきたいと考えております。

本日はお疲れのところ本当にありがとうございました。

○事務局

以上をもちまして検討委員会を終わります。ありがとうございました。